

# 二宮尊徳の仏教観

—— 広池千九郎の思想との対比 ——

竹内啓二

## 目次

- はじめに
- 一、当時の仏教に対する批判
  - 二、尊徳における仏教の真理の独自なとらえ方
    - (一) 不動尊について
    - (二) 天上天下唯我独尊について
  - 三、仏教的悟道の意義
    - (三) 如来とは
    - (四) 極楽浄土は現世である
    - (五) 観音経と無利息金貸付法
- むすび

## はじめに

本稿は、二宮尊徳の仏教観を、尊徳の門人の齋藤高行の著した『二宮先生語録』と、同じく門人の福住正兄の著した『二宮翁夜話』を資料としてとらえようとするものである。その際、広池千九郎の思想、特にその仏教理解と対比しながら、尊徳の仏教観を探る。

## 一、当時の仏教に対する批判

尊徳は、当時の仏教者のあり方、その教学一般を否定している。『夜話』一七二に、「今の世の仏者達の申さるる仏道が誠の仏道ならば、仏道ほど世に悪しき物はあるまじ」という恵心僧都「源信」の言葉を示されたとき、「まことに名言なり。ただ仏道のみにあらず、儒道も神道もまた同じかるべし。」と述べている。尊徳にとって、当時の仏教、儒教、神道のいずれもが否定されるよりほかなかったのである。

当時の仏教について、次のように尊徳は述べている。

仏道の伝来祖々厳密なり。然りといえども古と今と表裏の違いあり。古の仏者は鉄鉢一つをもって世を送れり。今の仏者は日日厚味「御馳走」に飽けり。古の仏者は糞掃衣とて人の捨てたる破れ切を緘じあわせて体を覆う。今の仏者は常に綾羅錦繡をまとえり。古の仏者は山林岩穴つねに草坐せり。今の仏者は常に高堂に安坐す。これ皆遺経などに説く所と天地雲泥の違いにあらずや。『夜話』一七一

さらに、『夜話』九一において、尊徳の歌、「むかしより人の捨てざる無きものを拾い集めて民にあたえん」を引いて、尊徳の道は、人が捨ててはいないが無価値なもの、例えば、荒地、借金、富人の驕奢、貧人の怠惰などをよく拾い集めて国家を興す資本とし、人々を救う道であるのに対し、人が捨てたものを拾うのが僧侶の道であるとして、「世の人に欲を捨てよと勧めつつ跡より拾う寺の住職」という古歌を引いている。

また、『語録』九三には、日本國中、荒地や借財の問題で苦しんでいるのは、当時の文武のまつりごとと神儒仏の教えとの中に、身を修め家をととのえ、国を治める方法が欠けていることから来るものであるとし、このような困苦を救済して政治教化を補うためには、ただ尊徳の道があるだけである、と述べている。そして尊徳の道は、

国政や三教が不備のため、その網から抜けおちて起こる諸問題を救済していく道である、と断言している。

広池千九郎も同時代の仏教の退廃を指摘し、批判している。広池は、東洋諸国に広まった仏教が委縮退廃して、生命を失ってしまっていると見る。そして、その原因として、第一には釈迦の深い慈悲心の価値と、その慈悲心の結果としての人心救済の至誠心の価値が、一部のすぐれた人以外には理解できなかったため、ただ研学、思索、弁論、法会、礼拝、儀式、念仏、修行、説教、宣伝、布教などの形式にこだわって、釈迦の真精神を実現することができなかったことをあげている。

第二の原因は、根本である釈迦の真精神が理解されていなかった結果、釈迦の哲学や道德上の教説が、単に仏教家の研究の対象に止まって、真剣にそれを実行するものがなかったことをあげている。『道德科学の論文』⑥  
二〇二―二〇三頁

また、続けて次のように述べている。

すでに、実行のない以上は、この広大深遠なる釈迦の哲学も、道德上の教説も、みなこれを知的に知るのみにて、道德の実行に最も必要な原動力たる神（本体）の慈悲に感激する精神作用が乏しいから、仏教が宗教としての生命を失い、今日世界において最も釈迦の教えを要求する場合に、何らの機能をも実社会に実現することが出来ずにおるのです。『論文』⑥二〇三頁

実社会の問題を解決する力をもった教えとして自らの道を提示しているという点で、尊徳と広池は一致している。

## 二、尊徳における仏教の真理の独自なとらえ方

実社会の問題にとりくんでいく中で、尊徳は独自の仏教解釈を行なっている。そのいくつかを見てみよう。

### (一) 不動尊について

尊徳が桜町仕法において万策つきたとき、成田山の不動尊に断食祈誓して、深く悟るところがあった。ある時、山内総左衛門が床にかけられた不動尊の軸を見て、尊徳に不動尊を信仰するかと聞いた。尊徳は次のように答えている。

予、壮年、小田原侯の命をうけて、野州物井に来る。人民離散、土地荒蕪、如何ともすべからず。よって功の成否に關せず、生涯此処を動かじと、決定す。たとえ、事故出来、背に火の燃えつくがごときに立ちいたるとも、決して動かじと、死をもつて誓う。しかるに、不動尊は、動かざれば尊しと訓ず。予、その名儀と猛火背を焚くといえども、動かざるの像形を信じ、この像にかけて、その意を妻子に示す。不動仏、何らの功驗あるを知らずといえども、予が今日にいたるは、不動心の堅固一つにあり、よって今日もなおこの像をかけて、妻子にその意を示すなり。(『夜話』五〇)

尊徳はここで、「不動尊」を「動かざれば尊し」と読み、いかなる困難あるも問題を解決するまではその場を離れない不動心を肝に銘じている。

さらに、『語録』二二九でも、次のように説いている。

仏経にいわゆる不動尊は、何をいうや。動かざるをもつて尊しとするなり。その像、火炎の中にあり。これ

中心の欲情をあらわし、もつて衆に示すなり。古より以来、貴賤上下家をうしない、国を亡ぼす者、火炎たる欲情の熱くところとなる。日夜炎炎たる欲情の中にありて毅然として動かざるは、不動の徳なり、よく不動の徳を修めば、すなわち何ぞ家をうしない国を亡ぼすことこれあらん。

ここでは、欲望に対して毅然として動かさない「不動の徳」を自分のものとすることを説いている。このように尊徳は仏教の真理を現実の実践にひきつけて理解しているのである。

### (二) 天上天下唯我独尊について

釈迦が誕生した時、「天上天下、唯我独尊」と揚言したといわれるが、尊徳によると、この言葉は、天地間に生ずるものは、賢愚、貴賤、貧富の別なく、鳥獣虫魚に至るまで、自分より尊いものはあり得ない、ということの意味している。世間の人は、釈迦が自分自身の徳を称えたものだとして解釈しているが、それは間違いであるとする(『語録』二一七、『夜話』一七〇)

広池千九郎もこの言葉について一般の解釈と異なった独自の解釈をしている。広池によると、この言葉は釈迦が生まれた時に唱えたものではなく、釈迦が幾多の功德を積み、ついに悟りを得た時に唱えたものである。そして、その意味は利己の本能を没却して、人心の開発救済をなすことを目的として努力する聖人は、この宇宙間においてひとり優れて尊いということである、としている。(『論文』①八〇―八二頁)

尊徳においては、それぞれの人にとって自分というものはかけがえない尊いものである、と解釈されるのに対して、広池においては、聖人の実行、事蹟の尊さを意味するものと解釈されている。言い替えると、尊徳は、自己の大切さ、自己の尊重すべきことと理解しているが、広池は聖人の偉大さを表現したものと解している。

(三) 如来とは

尊徳は、『観無量寿経』の「光明遍照、十方世界、念仏衆生、摂取不捨」について、次のような独自の解釈を行っている。すなわち、「光明遍照」とは、如来の光明が遍く世界を照らすことである。如来とは太陽のことである。太陽は毎日東から出て、まるで毎日来る如くであるから、如来という。「十方世界」とは、東西南北と西北、西南、東南、東北と、天地との十方である。「念仏衆生」とは生きとし生けるものすべてのことである。人類や鳥獣はもちろん、生きとし生けるものはことごとく太陽を仰いで生々を念願する。その意味で、生きとし生けるものはすべて念仏衆生である。「摂取不捨」とは、生々を願うものは、太陽があまねく洩らすことなくそれらを照らして、ことごとくその生々を遂げさせてくれることをいうのである。(『語録』二二二、『夜話』六五)如来とは太陽のことである、という解釈は、日々、太陽の恵みを受けて農業に勤しむ農民にとって理解しやすい解釈である。広池によると、麗沢とは、太陽が天にかかつて、万物を恵み潤すという意味である。尊徳も広池も太陽の万物生育の働きに注目した点において共通している。ただ尊徳は『無量寿経』の「如来」をとりあげ、広池は『易经』の「麗沢」をとりあげているのである。

(四) 極楽浄土は現世である

尊徳は、現世は極楽浄土であると説いている。仏教では極楽浄土を説いて、「地上には金銀が布きつめてあるし、山には珠玉が積み重なっている。海はといえば珊瑚や琥珀や瑠璃や硨磲や瑪瑙がいっぱいある」(『阿弥陀経』)などという。しかし、金銀珠玉や宝貝の類がそんなにくさんあれば、砂利と相違がなく、そうなれば金銀珠玉も別段尊ぶに当たらなくなる。この世の中では、網を海に入れば魚類が得られ、おのを山林に入れば材木が得られ、田地を耕せば百穀が得られて、尽きることがない。これらは皆、金銀珠玉に換えられるし、たとい換えられなくとも、実際の値打ちは金銀珠玉にまさる。我々の住む現世はこのとおり豊饒なもので、この現世こそ真の極楽浄土である。しかも、働けば働いただけそれだけの宝が得られる。実にこの世は尊ぶべき極みである。(『語録』二二〇)

ここに見られるように、尊徳は現世を重視した。来世に極楽があると考えて、現実の生活が空虚になってはいけないという立場に立つものである。このような考え方は広池千九郎にも見られる。広池は、「極楽といい、六道というも、みなこれ人類各自の胸中もしくは人類社会の中に存在する種々の現象を指したるものにほかならぬ」(『論文』⑥二〇〇頁)と考えている。

(五) 観音経と無利息金貸付法

尊徳は仏教を現実の問題解決に適用するために独特の解釈をしている。その典型的な例を観音経の解釈にみることができる。

尊徳は観音経の深い意義を探り、無利息金貸付法を設けた、と述べている。すなわち、出納簿で言えば、入金を観音とし、出金を衆生とし、通計を菩薩と見ている。また、人について言えば、無利息金の貸付を行なう者は観音であり、貸付を受ける者は衆生である。いったん貸付を受けても、これを返せば観音になる。なぜなら、その返金によって他の窮乏者を救済できるからである。ここに観音経の深い意味が実現される。すなわち、困っている人々の音声を観じて、その苦しむところを除き、その足らないところを足し、その求めるところに応じ、そ

の欲するところを与えるのである。(『語録』二七〇)

### 三、仏教的悟道の意義

尊徳の独自の仏教解釈を見てきたのであるが、それでは仏教のめざす悟りを尊徳はどうとらえていたのであろうか。尊徳は悟道と人道を対比して次のように述べている。悟道というのは、例えば、まだ耕さない前に、当年は不作であろうと観ずるようなことである。田畑は開拓したところでまた荒れるのが自然の道だ、と見るのが悟道である。悟道はただ自然の行くところを観ずるもので、その上でつとめる立場が人道である。人倫の道とするところは、仏教でいわゆる三界城裏のことである。「十方空」を唱えるときは、人道は滅してしまふ。名僧を尊び娼妓を卑しむのは迷いである。しかし、このように迷わなければ人倫が行なわれない。悟道の立場からすると人倫に益がないということになるが、一方、悟道でなければ執着を脱することができない。それが悟道の妙用である。人倫は丸太を削ったり角材にしたり、穴をあけたりして家を造ることである。それに対して、本来ない家であるとして、執着を破るのが悟道である。破って捨てるから「十方空」に帰するのである。(『夜話』七〇)

また、仏教の悟りについて次のように述べている。

翁いわく、仏は諸行無常というなり、世上に諸の行なわるる物は、皆常に無き物なり。然るを有ると見るは迷なり、なんじらが命、なんじらが体皆然り。長短遅速は有りといえども、皆有るにはあらず、有ると思ふは迷いなり。本来は長短もなし。遅速もなし、遠近もなし、生死もなし、蜚蜉の一時を短しと見、鶴龜の千年を長しと思ふがときは皆迷なり。然といえども、此理は見え難し、凡人にこれを見するは遠近のみ、是は我が悟道の入門なり。「見渡せば遠き近きは無かりけり、己々が住処にぞよる」見渡せば生死生滅無かりけり、見渡せば善きも悪しきもなかりけり、見渡せば憎いかわゆい無かりけり。この歌を感じる時はその道理知らるべきなり。…惜しい、欲しい、憎い、かわゆい、彼も我も皆迷なり。此のごとく迷うが故に三界城という堅固な物ができて人を憎み、人を恨み、人をねたみ、人をそねみ、人に憤り、種々の悪果を結ぶなり。これを諸行無常と悟る時は、十方空となつて恨むも、ねたむも、にくむも、憤るも馬鹿馬鹿しくなるなり、是の所に至れば自然怨念死霊も退散す、これを悟りという、悟るを成仏というなり、玩味して悟門に入るべきなり。(『夜話』続編三八)

自己の我執を越えるという意味で仏教の悟道は尊徳の教学の中に重要な位置を占めているが、ただ欲を脱し、この現実社会を離れて、一人悟りの境地にひたるということに対しては次のような厳しい批判をしている。

仏家にては、この世は仮りの宿なり、来世こそ大切なれ、というといえども、現在、君親あり、妻子あるを如何せん。たとい出家遁世して、君親を捨て、妻子を捨つるも、この身体あるを如何せん。身体あれば、食と衣との二つがなければ、しのがれず、船賃がなければ、海も川も渡られぬ世の中なり。故に西行の歌に、捨てはてて身はなきものと思えども雪のふる日は寒くこそあれ」といへり、これ実情なり(『夜話』二二七)

悟道によって悟りに達したならば、衆生済度に向かわなければならぬ。『語録』四二一には、この点について次のように述べられている。

緇徒(僧侶) 悟を貴ぶは、未だ迷界を免れざるなり。既に悟らば、すなわち何ぞもってこれを貴ぶに足らん。これを高山に登るに譬う。その高きを仰ぐ者は、未だ絶頂に至らざるなり。その悟を貴ぶ者は、未だ極度に至らざるなり。既に絶頂に至れば、すなわち四望して降り、既に極度に至れば、すなわちまた迷界に入り、済度を務むるのみ。もしそれ専ら悟を貴びて、済度を務めざれば、すなわち迷者と同じ。たとい数万の仏経

を誦し、正法眼蔵をきわむるも、済度の功なくば、なおへちま蔓延して実を結ばざるがごとく、いやしくも人世に功なくんば、すなわちいずれかまたこれを用いん。我が法はすなわち然らず、神儒仏三道を實行す。故に人世において無上の良法となす。何となれば、これを民に施して、衆を濟うの功あればなり。

ここに言われる衆生済度は、ただ単に観念的な救いの境地に人々を導くことではない。人々の現実の経済生活を改善する治国安民の道である。尊徳の道は、つねに現実の問題をいかにするかについて具体的な解決策を示すものであった。まさに、「実学」の立場に立ち、「実地の正業」を取り行なう道であった。

### むすび

本稿では、尊徳の仏教観について、広池千九郎の思想、仏教理解と対比しながら探ってきた。尊徳も広池も既存の仏教のあり方を批判し、実際の問題を解決に導きうる道を説いた点で共通している。現実の問題をいかに解決していくか、という具体的方法について、両者の間に違いがあるのは時代状況からしても当然であるが、自己の利己心、我執を脱して、人のため、社会のために尽くすというところに人間の真のあり方、生きるべき道を見出だしていった点で両者は一致している。

尊徳はいかにしたら現実の問題を解決しうるか、という観点から仏教の真理を独自の仕方でもとらえている。その教えは無学な農民にもわかるように具体的である。観念的、抽象的に理論を展開するのではなく、農民が実際生活において経験することがらに即して、仏教の教えを尊徳なりに解釈している。

不動尊に、外的内的な試練や誘惑に負けない不動心を学ぶ尊徳は、「天上天下唯我独尊」を、すべての人にとつて自分が最も大切である、という意味にとり、自己尊重を説いている。また、如来とは太陽のことであり、万物

を恵み、育む慈悲の心を大自然の働きに見ている。そして、働けばその報いが得られるこの世こそ極楽浄土であると説くことによって、現実の生活における勤労の意義を強調している。さらに、無利息金貸付法を観音の抜苦与樂の精神によって運用すべきことを説いている。

このように、尊徳は仏教の真理を自己の独自の経験に基づいて解釈している。尊徳のいわゆる「胸中の温気」によって、仏教の教理という氷を溶かし世の中の役に立つ水に変えているのである。聖人の教えを現代に生かそうとする広池千九郎も、この点において尊徳と同じ立場に立っている。すなわち、「モラロジーは道德の實行に当たりてこれ「聖人及び祖師の教え」を有効に好結果を取むるよう、道德の標準とその實行の標準とを示さんとするもの」(『論文』①九九頁)という言葉に、聖人の教えという氷を、道德實行の標準という水に溶かそうとする広池の意図がうかがわれる。

自己の我執を去り、煩惱を減するために、仏教の悟道が必要であると説く尊徳であるが、悟りの境地に止どまり、現実の世界から逃避するだけの悟道を否定する。独覚から正覚、自己の悟りから他者の救いへの道が必要とされるのである。自我を没却し、品性を完成するとともに、慈悲を實現し、人心を救済することが要請されるモラロジーとの一致点をここにも見出だすことができる。

### 《参考文献》

下程勇吉『増補 二宮尊徳の人間学的研究』広池学園出版部

昭和五十五年

尊徳・大原幽学集』玉川大学出版部 昭和四十一年

下程勇吉・久木幸男校註『世界教育宝典 日本教育編 二宮

二宮尊徳全集』第三十六卷 別輯 門人名著集 二宮尊徳偉業宣揚会 昭和六年

広池千九郎『新版 道德科学の論文』広池学園出版部 昭和  
六十三年

佐々井典比古『二宮尊徳「語録」「夜話」抄』やまと文庫

一〇三樹書房 昭和六十年

黒岩一郎『新講・二宮尊徳夜話』第五版 明德出版社 昭和  
四十九年

吉地昌一『二宮翁夜話』上・下 二宮尊徳全集①② 福村書  
店 一九五七年